

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	韓 暁
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>日本語学習者のシャドーイング時の音韻・意味処理に及ぼす ワーキングメモリ容量と音韻的短期記憶容量の影響</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 松 見 法 男</p> <p>審査委員 教 授 深 澤 清 治</p> <p>審査委員 教 授 宮 谷 真 人</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、中国語を母語とする日本語学習者（以下、学習者）を対象に、認知心理学の観点から、日本語のシャドーイング（shadowing）のメカニズムを実験的に検討したものである。具体的には、学習者の認知能力としてワーキングメモリ（working memory：以下、WM）と音韻的短期記憶（phonological short-term memory：以下、PSTM）を取り上げ、WM と PSTM の容量の個人差が、シャドーイング時の音韻処理と意味処理に及ぼす影響について調べた。</p> <p>論文の構成は、以下のとおりである。</p> <p>第1章では、シャドーイングのメカニズムを解明する意義を論じた上で、先行研究を概観し、本研究の問題と目的を述べた。近年、第二言語の教育では、言語知識を繰り返し使用する学習法の一つとして、シャドーイングが注目されている。一定期間のシャドーイング訓練による効果に関しては、これまで多くの研究がなされてきたが、シャドーイングのメカニズムに関する検討は不十分であり、未解明の部分が多い。そのため、教室場面などへの効果的な導入法が定まっておらず、シャドーイングの訓練効果やその体験は学習者によって異なる。本研究では、学習者の WM と PSTM に着目し、記憶容量の大きさによって、シャドーイング時の音韻処理と意味処理が異なるか否かを実験的に検証する。</p> <p>第2章では、3つの実験内容について述べた。実験1では、シャドーイング時の音韻処理と意味処理のレベル・単位の大きさに及ぼす WM 容量と PSTM 容量の影響を明らかにするため、前出文と後出文の音韻的または意味的な関連性を操作した関連文材料を用いて検討を行った。その結果、学習者が日本語文をシャドーイングするときは、文の音韻処理も意味処理も行われるが、WM 容量の大きい学習者と小さい学習者では、異なるレベルの意味処理が行われること、また、PSTM 容量の大きい学習者と小さい学習者では、音韻処理の単位の大きさが異なることが、それぞれ示された。実験2では、シャドーイング時の音韻処理と意味処理の時間的關係に及ぼす WM 容量と PSTM 容量の影響を明らかにするため、シャドーイングにおける反応時間と再生時間を指標として検討を行った。その結果、学習者が日本語文をシャドーイングするときは、WM 容量と PSTM 容量の大きさによって、音韻処理と意味処理の同時性が異なることが示された。WM 容量の大きい学習者は、</p>			

音声聞こえたらすぐに、その情報の意味アクセスを行い、その後に口頭再生を開始するが、WM 容量の小さい学習者は、音声聞こえたら、その情報の意味アクセスを行わずに、すぐに口頭再生を開始する。また、PSTM 容量の大きい学習者と小さい学習者では、音韻アクセスの際に処理できる単位の違いが生じる。実験 3 では、2 文からなる短い日本語文章をシャドーイング材料として用い、文と文の間の時間的間隔の長短と文脈性の高低を同時に操作した上で、シャドーイングの遂行成績に及ぼす WM 容量と PSTM 容量の影響を調べた。その結果、日本語文章をシャドーイングするときの遂行成績は、WM と PSTM の容量の他に、音声材料のポーズの有無や文脈性の高低といった材料要因にも影響されるが、その現れ方は記憶容量の大小によって異なり、しかも前出文と後出文のそれぞれにおいても異なることが示された。

第 3 章では、3 つの実験について総合考察を行った。シャドーイングの認知プロセスに関する探索的なモデルを提案し、本研究の教育的意義と発展課題を述べた。一連の実験的検討の結果から、学習者の WM と PSTM がシャドーイング時の音韻処理と意味処理を支える重要な認知能力であることが明らかとなった。WM 容量と PSTM 容量の小さい学習者は、文レベルの意味処理に注意を配分することが難しいため、シャドーイング訓練の初期段階では、たとえば音声材料の文と文の間に適切なポーズを挿入するなどして、材料提示の仕方を工夫する必要があるだろう。今後は、シャドーイング時の音韻処理と意味処理の各段階をモデルに沿って詳述するとともに、それらの関連性を解明することが課題となる。

本論文は、次の 3 点で高く評価できる。

1. 従来の第二言語教育におけるシャドーイング研究では、シャドーイング遂行の評価基準として、口頭再生の流暢性や正確性といった音韻処理の側面が重視される傾向があったが、本研究では、意味処理の側面も同様に重要であることを実証した。
2. 一文のシャドーイングとは異なり、文章のシャドーイングでは、遂行成績に文と文の間のポーズの有無や文脈性の高低といった材料要因が影響を及ぼすことを明らかにし、WM 容量や PSTM 容量といった学習者要因との関連性についても考察した。
3. 学習者のシャドーイング時における音韻・意味処理の同時性に WM 容量と PSTM 容量が影響を及ぼすことを明らかにし、その結果に基づいて、シャドーイングの認知プロセスを説明するモデルを提案した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 28 年 2 月 10 日